The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「初恋」題詠歌考
Author(s)	佐藤, 明浩
Citation	詞林. 1987, 1, p. 11-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67235
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「初恋」題詠歌考

佐藤明浩

はじめに

平安時代の後期、ことに院政期以降、題詠による作歌がさかんになった。この時期における歌壇の状況、歌人たちの動向は、橋本不美男氏（注1）、井上宗雄氏（注2）その他の先学によって、かなり詳細な点まで明らかにされており、それによって題詠歌の詠作事情を知ることができる。

この院政期から新古今時代にかけて、題詠の方法は発展し、歌の内容は深化していったであろうことは、想像に難くない。本稿では、「初恋」というひとつの題をとりあげ、この題のもとによまれた歌を時代を追って検討することにより、題詠の発展・深化の具体相の一端を明らかにしたい（注3）。

ところで、平安期の貴族たちにとって、恋歌はきわめて実用的な意味をもっていた。男性が女性に求愛する場合、必ず和歌が用いられるのであった。ここに愛の恋歌が貴族の生活と密着した形で存するのであるが、一方、題詠の恋歌も院政期になると盛んに詠まれるようになる。これら愛の恋歌と恋の題詠歌とでは、性格を異にする面がある。前者は多くの場合、贈答の形をとるわけだが、特に返歌は贈られてきた歌を強く意識して詠まれるのが常であり、贈歌の内容や表現に制約されるため、一首の独立性は弱い。また、贈答歌の内容やそこで用いられる修辞は、恋を成就させるなり、関係の発展を求めるなり、時には相手を拒絶するなり、そういった何らかの目的を効果的に果たすことに奉仕するものでなければならない。これに対して、題詠歌の場合は、題を満足させつつ、独立した一首の世界を確立することが求められるであろう。したがって、贈答歌をそのまま踏襲したのでは題詠歌として不充分な場合が多いと考えられる。恋の題詠歌には、特有の難しさがつきまとっていたと言えるであろう。

もっとも、例えば、「後朝」という題の場合には、題詠歌の詠出も比較的容易であったと考えられる。後朝といえば、一夜の契りの後、別れを惜しんだり悲しんだりするのが常であり、日常生活においてもこの場面で歌をとり交わすのが普通であった。実際の恋の体験を通して、あるいはそういう場面を仮想することによって、具体的に把握できる題であったと言える。逆に言えば、「後朝」という題は、日常生活の中から、あるいは物語的場面から発想されたもの

であったのである。そのような題であってみれば、贈答歌で詠まれてきた内容や表現をそのまま踏襲しても題を満足させることができたのであった。ところが、「初恋」となると事情は異なる。「初恋」は「後朝」に比べると漠然とした題であり、題の意味自体、決して自明であるとは言えない。「初」の意味をどうとらえるかという、題詠の出発点において、かなりの可変性を有していたと考えられるのである。本稿で「初恋」をとりあげるのも、実はそういう性格を有する題であったからである。

一

『後拾遺集』に次の一首がある。

はじめのこひをよめる　　実源法師

なきなたつ人だによにはあるものをきみこふるみとしられぬぞうき（巻十一・恋一・六一三）（注4）

この歌の詠作事情は未詳だが、「初恋」題の詠歌と考えられるもののうち、現在知ることができる最も古い例である。「世の中には無実の恋の噂が立つ人さえあると言うのに、真実こんなにもあなたを恋い慕っている私であると知られないのはつらいことです」と、知られざる恋心を相手にわかってもらいたいという心情をうたっている。

ところで、『後拾遺集』の巻十一・恋一は、

東宮とまうしけるとき故内侍のかみのもとにはじめてつかはしける　　後朱雀院御製

ほのかにもしらせてしかなはるがすみかすみのうちにおもふ心を（六〇四）

ではじまっており、これ以下「はじめたる人につかはしける」（六〇五）「をんなをかたらはんとてめのとのもとにつかはしける」（六〇七）その「かへし」（六〇八）「はじめたるをむなにつかはしける」（六〇九・六一〇）「をとこのはじめてひとのもとにつかはしけるにかはりてよめる」（六一一）「をんなにはじめてつかはしける」（六一二）と続いている。この次に前掲の「なきなたつ」の歌が置かれていることに注意したい。『後拾遺集』恋一のはじめの部分には、初めて女性のもとにおくった歌が集められているわけだが、これらの日常詠と「初恋」の題詠歌が同列に扱われていたのである。

「なきなたつ」の歌の内容と『後拾遺集』の配列から、「初恋」の題意ははじめて女におくるにふさわしい歌を詠むことで満たされるというとらえ方が、当時あったことを窺い知ることができる。

二

康和二年（一一〇〇）『宰相中将国信家歌合』は、「初恋」「後朝」「遇不逢恋」「夜恋」「歴年恋」の五題からなる。恋題ばかりで構成されており、しかもそれが細分化している点、文芸意識に根ざした論難がたたかわされた点で、和歌史上、この歌合は画期的なものであると考えられている。

題詠について考察する上で、「初恋」二番の、

1人しれぬ恋にはまけじと思ふにもうつせびのよぞかなしかりける（右・勝・基俊）（注5）

に対する次の論難が注目される。

右歌はげにうたがらはをかしうもや侍らむ。はじめたる恋の心なむみえ侍らず。こひにはまけじとおもふに、とし月をふとも心くらべにはまけじとおもふに、うつせみのよのはかなきなむ、おそろしきことこそ侍めれ。はじめたる心なからむ恋の歌にはをかしうもや侍らまし。

二番は俊頼（左）対基俊（右）であり、この論難は俊頼によるものであると考えられる（注6）。俊頼は「はじめたる恋の心なむみえ侍らず」と基俊歌が題意を詠みこんでいない点を指摘している。これに対し、基俊自身この後の部分で「げにはじめたる心はよみおとして侍り」と題を詠み落としたことを認めているのである。この歌合当時の「初恋」題のとらえ方が示唆されていて興味深いのであるが、少なくとも年月を経た恋心を詠むのは「初恋」題にふさわしくないという認識があったことがわかる。また、俊頼の論難は、題意をつくしていることが歌合歌の価値を決める重要な要素であることを主張するものであり、題に対する関心の深さを窺い知ることができる（注7）。

本歌合の他の歌は、どのように詠まれていたであろうか。

2色みえぬ心ばかりはしづむれど涙はえこそしのばざりけれ（一番左・持・国信）

3いつしかとしをるるわれがたもとかななみだやこひのしるべなるらむ（一番右・持・顕仲）

これらは、恋の思いが涙によってあらわになることを詠んでいる。

4いはでただ思ひやるにてしらせばや人しれずのみこふるこころを（三番左・持・隆源）

5なるかみの音にききつる君なれば思ふこころをそらにしらなむ（三番右・持・仲実）

6あしのやのしののこすだれひまをあらみもらしてしかなかくるこころを（四番左・負・家職）

これらは、いずれも、自分の恋心を相手に知ってもらいたい、知らせたい、という内容の歌である。恋する相手に贈る歌であっても通用する内容である。特に5は、直接的に相手に訴えかける形をとっている。

俊頼の歌は、

7風ふけばたちろくやどの板じとみやぶれにけりなしのぶこころは（二番左・負）

というものであった。上句に新奇な序詞を用いつつ、忍んでいた恋心があらわになってしまったことを詠んだものである。

このように本歌合の「初恋」題歌の内容として、人目を忍ぶ恋心に関係するもの（2・3・4・7）、恋の相手に自分の思いを告げ知らせたいと願うもの（4・5・6）があった。世間や恋の相手に恋心を知られる以前の恋の諸相という比較的広い幅をもって、「初恋」題の意味が考えられていたと言えるであろう。

「国信家歌合」に続いて成立した『堀河百首』は、初めての組題百首であった。その恋題は「初恋」「不被知人恋」「不遇恋」「初遇恋」「後朝恋」「遇不逢恋」「旅恋」「思」「片思」「恨」の十題である。「国信家歌合」の「初恋」が、「初恋」「不被知人恋」「不遇恋」に細分化しているとみられる（注8）。したがって、歌人たちはそれぞれの題をより細かに詠み分けなければならず、題に対する意識が更に先鋭化していったと考えられる。

では、『堀河百首』の「初恋」題歌について検討していくことにする（注9）。

8おもひかねけふたてそむるにしき木のちつかもまたで逢ふよしもがな（匡房）（注10）

9行きかよふ中人たててけふこそは思ふ心をほのめかしつれ（国信）

10おもひあまりけふいひ出す池水のふかき心を人はしらなん（顕季）

11下にのみ恋ひわたりしを玉のをの乱れてけふぞ人にしらるる（藤原顕仲）

12けふこそははつかにみつれ程もなく何とみだるる心なるらむ（隆源）

これらの歌には「けふ」という語が共通して用いられている。「初恋」という題の意味を明確に表現しようとしたものであろう。

13恋せじとちかひてし身をいかにしてこはこりずまに思ひそむらん（師頼）

14まだしらぬ人をはじめてこふるかなおもふ心よ道しるべせよ（肥後）

13の「思ひそむ」、14の「はじめて恋ふる」という表現にも、「初恋」の題意を明確化しようという意図が窺われる。『国信家歌合』の「初恋」題歌と比べると、「初」に対する意識が強まっていると言える。

ただし、「初恋」の題意を充足しているかどうか、疑問の残るものもある。

15心こそかどでするよりまどひけれあふを限となれる恋ぢは（師時）

16木の間よりひれふる袖をよそにみていかがはすべき松浦さよ姫（基俊）

15は「かどで」という言葉によって題意を満たそうとしたものであろう。しかし、すでに恋の相手と遇った後の時点を想定して詠まれたものであり、「初恋」「不被知人恋」「不遇恋」「初遇恋」「後朝恋」「遇不逢恋」という題の設定が、恋の展開していく順序に従っていると考えられることからすれば、この歌は題意と合っていないと言わざるをえない。15の歌は、恋の展開の上からいえば「初遇恋」よりも後の内容なのであり、「遇不逢恋」の題意に該当するものであろう。

16は『万葉集』巻五の、

遠つ人松浦佐用姫つま恋にひれ振りしより負へる山の名（新編国歌大観番号八七五）

以下の歌群に基づくものである。しかし、これらの万葉歌は、「初恋」と特に関係のあるものではない。16の歌は、後に『千載集』巻十四・恋四に撰入された。恋四といえば恋五巻中の後半にあたり、配列の上からいうと、「初恋」題の歌が位置すべき部分ではない。そうすると、千載集撰者の俊成はこの歌に「初恋」の意味を認めていなかったということになる。確かに、16の歌には、「初恋」題歌としての必然性を見出し難い。前に言及したように『国信家歌合』では基俊歌が「はじめたる恋の心なむ見え侍らず」と批判されていたが、それと共通する点をもつ、題意を尽くしていない歌なのであった。

ところで、『堀河百首』の「初恋」題歌にも、贈答歌の表現や内

容に類似したものがみられる。

17星崎やあつたのかたのいさり火のほのもしりぬや思ふ心を（仲実）

ほのかにもしらせてしかなはるがすみかすみのうちにおもふ心を（後拾遺集・巻十一・恋一・六〇四・後朱雀院）

の両歌は、「ほの」「ほのか」の語、および結句が共通しており、詠みぶりも似ている。また、前掲10の顕季歌と、

八月ばかりをんなのもとにすすきのほにさしてつかはしける　祭主輔親

しのすすきしのびもあへぬ心にてけふはほにいづるあきとしらなん（後拾遺集・巻十一・恋一・六一九）

についても、同じようなことが言える。ここに掲げた『後拾遺集』の贈答歌は、いずれもはじめて女性につかわす歌であったが、仲実や顕季は、そうした内容を「初恋」題歌として詠んでいるのであった。このことから、「初恋」題のひとつのとらえ方を知ることができる。そして、それは、一で検討した後拾遺集歌「なきなたつ」や『国信家歌合』の4・5・6の歌と共通するものであった。題詠する際に艷の歌における類型に倣う面があったことを窺い知ることができる。

俊頼の「初恋」題歌は、

18難波えのもにうづもるるたまがしはあらはれてだに人を恋ひばや

というものであった。上句に序詞を用いていることもそうだが、忍恋の内容と近い点、『国信家歌合』での作「風ふけば」の歌と共通している。基俊の堀河百首歌も『国信家歌合』での作と共通する点があったのであるが、当時を代表する二人の歌人について考える上で興味深い事実である。ここでみる限り、基俊よりも俊頼のほうが題への関心が深かったと言えるであろう。

以上みてきたように、『堀河百首』では「けふ」などの語を用いて「初恋」の題意を明確に表そうとした歌が多かった。その点、先行する『国信家歌合』よりも題の意味がよく追究され、歌人たちが題意に敏感であったと言える。そして、それは題が細分化したことがひとつの原因となっているのだと考えられる。各題を詠み分けることが必要になったことが、歌の表現や内容を規定するという側面をもつのである。ただし、「堀河百首」にも15・16のように題意を満足させているかどうか疑問の残る歌もあった。また、贈答歌の表現や内容に近いものがあり、贈答歌の類型に倣う面があった。題詠歌としての独自性はいまだ確立されていなかったとみられる。それから、『国信家歌合』『堀河百首』を通じて、俊頼が忍恋に近い内容を「初恋」題のもとに詠んでいたことも注意しておいてよいであろう。

三

治承二年（一一七八）『右大臣家百首』は、九条兼実主催の歌壇行事であった。俊成は他の歌人たちに遅れて詠進したのであったが、彼がはじめて九条家の行事に繋がったという点でそのひとつの大きな意義を認めることができる。この催しに参加した歌人は俊成を含めて十九名と考えられている（注11）。本百首は二十題、各題五首からなり、恋題は「初恋」「忍恋」「初遇恋」「後朝恋」「遇不逢

恋」で、『堀河百首』の「初恋」「不被知人恋」「不遇恋」「初遇恋」「後朝恋」「遇不逢恋」をほぼ踏襲したものと考えられる。

本歌合の「初恋」題歌のうち、特に俊成の作には新しい傾向がみられる。まず、その俊成の作から検討を加えることにする。

1しるしあれといはひぞそむるたまばはきとる手ばかりのちぎりなりとも

この歌は『万葉集』巻二十の、

初春の初子のけふの玉箒手にとるからにゆらく玉の緒（三八五二）

を本歌とするが、より正確には『俊頼髄脳』に載せる次のような伝説に基づいたものとみたほうがよい（注12）。

京極の御息所（時平女）が志賀寺へ参ったところ、ある老法師がその姿を見た。翌日その老法師は御息所を訪ねて行き、御息所の顔を一目拝見したいと言う。御息所が簾を上げると、今度は手をいただきたいと言う。手をさし出すと、老法師はそれを額にあてて、この「手にとるからに」の歌を詠んで、感涙にむせんだ。御息所も歌を返した。

俊成歌の「たまばはき」は序詞としてのはたらきをもっていて「とる手」を導き出しているのであったが、志賀寺上人の伝説を踏まえていると考えると、下句の意味は「たとえ志賀寺上人のように手をにぎるだけであっても、恋する人と契りを結びたいものだ」と解せる。『俊頼髄脳』所引の志賀寺上人の伝説は『古来風躰抄』にほぼそのまま引用されているから、俊成が充分親しんでいたものであったと考えられる（注13）。ちなみに、『六百番歌合』では、

玉ばはき手に取る程も思ひきやかりにも恋をしがの山人（老恋・四番右・負・家隆）

という歌が詠まれ、この歌に対し、「左申云、右歌、恋僧事にいでくべくや」という論難が行われている。これも志賀寺上人の伝説を踏まえての詠歌・論難であった。歌人たちにとってこの伝説が常識的なものであったことが窺われる。

さて、俊成歌では「たまばはき」が序詞的に用いられていたが、「たまばはき」は正月子の日に蚕室を掃くのに使われたほうきとされ、和歌においても、

玉ばはき春のはつねに手折りもて玉のを長くさかゆべらなり（堀河百首・子日・二三・仲実）

あたらしき春の初子に成りにけりしづのまろやに玉ばはき取る（久安百首・春・五〇三・隆季）（注14）

というように、初春、初子の歌に詠まれていた。俊成自身も、

たまばはきはつねの松にとりそへて君をぞいはふしづのこやまで（正治初度百首・春・一一〇七）

と詠んでいる。「たまばはき」は初春、初子をただちに想起させる言葉であった。「初恋」題歌に詠みこまれるにふさわしいイメージをもった言葉であったと言える。

ところで、『堀河百首』「初恋」の、

おもひあまりけふいひ出す池水のふかき心を人はしらなん（顕季）

は、「池水」が序詞となっている点、形の上で1の俊成歌と共通している。顕季歌の「いひ」は、「言ひ」と「樋」（池などの水を流す地中に埋めた板の箱）を掛けており、「池水」の縁語となっている。このように、いひ・池水・深しとつないでいる点は表現技巧の

上ですぐれているといえるが、序詞「池水」と「初恋」題との関係は希薄である。この題季歌と比較した場合、「たまばはき」を用いた俊成歌は、題詠歌としてより進歩したものになっていると言えるであろう。新古今時代になると、心象を景物等によって象徴的に表現する歌が多くなるが、この俊成歌にはそうした傾向がみられるのである。

1の歌以外の俊成の作は、

2なにせむにふみそめつらむみ山地のくるしかるべきいはのけしきを

3こひ草にしをれそめぬるたもと哉つゆじもおかむほどぞしらる

4ともしする葉山がすそのしたつゆやいるよりそではかくしをるらむ

5しるやいかに君をみたけのはついもゐ心のしめもけふかけつとは

というものであった。5の「はついもゐ」の語は、1の「たまばはき」と共通する性格をもっていると言えるのではないであろうか。この5は見初めた女性に贈る歌としても通用するが、2・3・4の歌はそういう性格を有していない。もっぱら恋が芽生えた自分の心に目を向けて、その状態を表現したものである。2は「ふみ」に「踏み」と「文」を掛けており、一応恋の相手との関係が問題になっているものの、相手に訴えかけるのではなく、恋の苦しみを知った自らの心を、後悔の念を含みながら見つめ直すという内容となっている。これらの俊成歌は日常詠の作風から脱け出し、恋を抱きはじめた心を内省的にとらえて表現しているが、その点に詩としての進歩を見ることができる。

俊成以外の歌人の作はどのようなものであったであろうか。俊恵の作は「林葉集」によって五首すべてが知られる。

6まだしらぬ恋路にふかく入りしより露分け衣濡れぬ日はなし

7なにとなく詠めにぬるる袂哉恋てふ物はこれかあらぬか

8人心とけよといはふ玉づさを結びはそめしいみもこそすれ

9恋はさはみし面影の身にそひてたもとを濡らすなにこそ有けれ

10けふこそはふみそめつるをくれなゐのいつあがりける恋の千しほぞ

7は現在言ういわゆる初恋（ハツコイ）の歌である。今まで恋というものを知らなかったので「恋というものはこれだろか、ちがうだろうか」と疑いながらも、恋心の萌芽に伴う心の変化を自覚しているのである。こうしたいわゆる初恋の歌は、他の歌人の作にもみられる。

11さもこそはまだ見ぬ恋の道ならめ思ひたつよりまよひぬるかな

（隆信）

12いとせめてひとをゆかしくおもふかなこれをこひとはいふにやあるらむ（資隆）

13くるしさはおもひよるよりかかるかとこひになれたるひとにとはばや（仲綱）

このような、いわゆる初恋の歌は『堀河百首』のころには確かな作例がなかった。「初恋」題の意味として新しいものが付け加わったと言えるであろう。

8・10は、恋の相手に文をつかわすことを内容としている。このように初めて恋文をおくることに関する歌も、他にみられる。

14おもひ河いはまによどむみづぐきをかきながすにも袖はぬれけり（皇嘉門院別当）

また、次のような歌ははじめて恋心を相手に告げ知らせる意味をもっているものとも考えられる。

15君にかくみだれそめぬとしらせばや心の中にしのぶもぢずり（兼実）

16こころざしありそのうらによるなみのおもひかけつといもしるらめや（仲綱）

17ゆめのうちにたれともしらぬ人みえばこのたまづさにおもひあはせよ（資忠）

18かくなむといはせのもりのこのまよりもらしそめつることのはぞそは（良清）

これら、恋の相手との関係に主眼を置く歌は『堀河百首』のころにも見られたものであり、それらを踏襲した作といえる。

『堀河百首』では「けふ」といった語を用いて「初恋」の題意を明確化している歌があったが、10の俊恵歌も「けふ」「ふみそめつる」といった語によって「初」の意味をはっきりとさせている。その他次のように「けふ」用いた歌がみられる。

19くれなゐのなみだをそでにせきかねてけふぞおもひのいろにいでぬる（兼実）

20けふこそはきみをみあれのあふひぐさおもひかけつとしられそめぬる（経家）

21なきかずにおもひなしつつすぐる身のこひゆへけふぞひとにしらるる（資忠）

22ひとりねのとこの山なるいさや河いさやこひぢもけふよりぞしる（隆信）

23いかにせんけふよりすだつはしたかのならはぬこひにかかるころを（良清）

（その他5俊成）

また、

24そでのうへのなみだぞいまはつらからぬひとにしらるるはじめとおもへば（宣秋門院丹後）

25こひくさのたねをばいまぞうゑそむるしげらぬさきにあふよしもがな（資隆）

26これやこのつもればうみとなるといふなみだのひとつおちはじめぬる（仲綱）

といった歌では、24「はじめ」、25「いまぞうゑそむる」（『禅林瘀葉集』では第二句「たねをばけふぞ」）、26「おちはじめぬる」に、「初恋」の「初」を明確な形で詠みこんでいる。

以上のように、本百首には『堀河百首』の「初恋」題歌の延長線上にある作が多かった。「けふ」などの語によって「初」の意味を表しているのは、直接的にせよ間接的にせよ堀河百首歌の影響を受けたものとみてよい。そうした歌の中で、いわゆる現代的意味での初恋の歌が登場してくるのは、「初恋」題の新しいとらえ方がなされた結果であろう。また、『堀河百首』のころみられたような題意を満たしていない歌は、本百首のころにはなくなっていた。題意をもれなく詠みいれる態度が徹底してきたと言える。こうした中にあって、表現の上でも内容の上でも新しい傾向を示していたのが、俊成の作であった。そして、それらの俊成歌において、恋心の萌芽を自覚し、自分の心を見つめる態度が基本になっているという点に注

目しておきたい。

なお、「右大臣家百首」をややさかのぼる年代、「崇徳院内裏十五首歌会」（注15）や「二条院内裏百首」（注16）にも「初恋」題があった。また、「三井寺山家歌合」（注17）でも「初恋」が題となっていた。これらの機会の作については、「右大臣家百首」における後成以外の歌人とほぼ同様の性格をもつことを指摘しておき、具体的な検討は省略する。

四

「六百番歌合」は詠歌・判詞ともに高い文芸性を有しており、歌合史上最も注目すべきもののひとつである。本歌合は十二人の歌人の組題百首を六百番に合わせて成ったものであるが、その百首の後半五十首が恋題ばかりである点、特徴的である。恋題がこれだけ細分化されていたということ自体、題詠史上画期的な事柄として特筆されてよいであろう。「初恋」題はその五十の恋題の最初に位置していた。次に、これらの歌に検討を加えていくことにする。

1しらざりし我恋草やしげるらんきのふはかかる袖のつゆかは
（一番左・持・良経）（注18）

2けさまでもかかるおもひはなきものをあはれあやしき袖のうへかな（一番右・持・慈円）

これらは、いずれも自分の中に恋心が芽生えたことを自覚したという内容である。本歌合においては、これらの歌のように、自分の心に目が向けられているものがほとんどであり、相手との関係に中心をおいた、贈答歌に近い内容のものは、少なくなってきている。

1の歌では「きのふ」と今日の違いを問題にし、2の歌では「けさ」と現時点の違いを問題にすることによって、まさに今、恋心が芽生えたのを知ったということを表しており、「初恋」の意味を明確に表現しえていると言えよう。「堀河百首」から「けふ」などの語を用いて題意を明確にしている歌がみられたが、それらの延長線上にあるものと考えられる。このように1・2の歌は題意をはっきりと表しており、恋心の萌芽を自覚的に詠んでいる点、評価に値するのであるが、逆に、あまりにはっきりと言葉にあらわれすぎているとも言えるのである。

その点、次の定家歌は題詠歌としてより洗練されたものになっていると言うことができる。

3なびかじなあまのもしほ火たきそめてけぶりは空にくゆりわぶとも（四番左・勝）

1・2と同じく、思い初めた恋心を表現したものである。しかし、鬱々とした思いを藻塩火のふすぶる煙の状態によって表しており、一首全体が暗喩となっている点、1・2とは異なっている。心象風景を事物によって象徴化して表現した歌と言えるであろう。「しるしあれと」をはじめとする「右大臣家百首」の後成歌の方向をさらに推し進めたものととらえることができる。

なお、六番の両歌、

4恋ひそむるこころのそこを尋ぬればひとやりならぬおもひなりけり（左持・兼宗）

5見そめつる人のこころやおもひ立つこひぢのすゑのをはり成らん（右持・家房）

に対して、「左右共に、五文字に題をあらはす、無念之由申之」と

いう論難が行われている。歌人たちが題に対して深い関心と鋭い感覚をもっていたことを窺い知ることができる（注19）。

本歌合では、日常詠の作風から離れて題詠歌独自の内容をもった歌の詠出が定着していた。前節までにみた歌には恋の相手との関係を中心にすえたものが多くみられたのであったが、本歌合においては自分自身の恋心を内省的にとらえることを中心とする歌がほとんどであったのである。そして、その自らの恋心を象徴化の手法をもって表現したのが、3の定家歌であった。

建仁元年（一二〇一）八月三日の『影供歌合』にも「初恋」題が設けられていた。

6我恋はけふ初時雨もるやまにかはる下葉の秋のひとしほ（一番右・持・定家）（注20）

7けふよりや人に心をおきつ浪かけてもしらぬ袖の浦風（二番右・持・雅経）

8きのふ迄かくやは袖のしほれにしあやしや露のところせきまで（十二番右・負・良平）

9見そめつるけさよりしげる恋草にいつしか深き袖の白露（十七番右・勝・宗安）

これらの歌は、6・7「けふ」、9「見そめつるけさ」、8「きのふ」といった言葉を用いて題意を明確化したものであり、本歌合の「初恋」題歌三十六首中十一首がこうした歌であった。「初恋」題歌を詠むにあたって、「けふ」などの語を用いて題意を表すことが、常套的な方法として定着していたことが窺われる。

また、8・9は、自分に恋心が芽生えていることを今悟ったという、自覚的・内省的性格を有するものである。本歌合にはこのような歌が多くみられ、「初恋」題のとらえ方として中心的なものになっていたことが知られる。

10習はねばまだしらね共これやさは怪しかるべき詠め成らん（三番左・持・通親）

11物おもへば涙の色はかはるかと恋になれたる人にとはばや（八番左・負・小侍従）

といった、いわゆる現代的意味での初恋の歌も優勢である。なお、11の歌は『右大臣家百首』の、

くるしさはおもひよるよりかかるかとこひになれたるひとにとはばや（仲綱）

と下句が一致している。あるいは偶然であるかもしれないが、いずれにせよ、類型的な発想となっていることが窺われ、現代的意味での初恋の歌も、そうした類型を生ずるほどに定着していたことが知られる。

一方、

12おもひあまりけふふみそむる丸木橋わたる計の契りとも哉（十五番右・持・景頼）

というように、恋の相手に自分の気持を初めて告げ知らせることを「初」の意味にあてている歌もみられる。しかしながら、そういう歌は数の上では少なくなっている。贈答歌に近いものも少なくなっており、

13いつしかとふかきためしは紅の初花ぞめの一しほをみよ（四番右・負・有家）

を挙げることができる程度である。

この『影供歌合』の「初恋」題歌も、恋心の萌芽を自覚的にとら

える歌が中心となっていて、日常詠の内容から離れている点、『六百番歌合』と共通する傾向をもっているのであり、当時の「初恋」題のとらえ方を確認することができる。また、先に二で言及したように『堀河百首』などの俊頼歌は「忍恋」に近い内容であったが、この時代になると「初恋」と「忍恋」の内容がかなり明確に区別されており、それぞれの題意のとらえ方が分化して定着していることがわかる。

最後に「影供歌合」の慈円歌、

14行末をおもふもかなしやがてさは涙にくもる秋のみかづき（四番左・勝）

に関連して考察を加えておきたい。結句「秋のみかづき」は、この歌合の行われた八月三日という「時」を意識して詠みこまれたものである。歌合の行われた「時」に即応した表現をとっているのであり、その点歌合歌として高く評価できるものであろう。だが、それだけではなく、今自分の見ている「秋のみかづき」が、思い初めた自分の恋心の象徴となっている点も見逃せない。

この歌は、次の同じ作者の歌との関係から注目される。

15我恋はほのめきそむるゆふ月よくもらでみばや有明の空（拾玉集・四一七九）（注21）

16あるかなきか心の末ぞ哀れなるふつかの月に雲のかかれる（同右・解一六七）

これらはいずれも「初恋」題の歌であり、夕月を詠みこんでいることが共通している。

15は恋の思いを抱きはじめた現在の心の状態を上句で表現し、下句では恋が進行していった先のことを思いやっている。「有明の空」にかかる月は、夕月から満月を経て再び欠けていったものであり、夕月と並べた場合、時の経過が意識されるのである。

やまのはにあかずいりぬるゆふづくよいつありあけにならんと すらん（二度本金葉集・巻三・秋・一七四・公資）

みか月のまたありあけになりぬるやうきよにめぐるためしなる らん（詞花集・巻十・雑下・三五一・教長）

といった歌が参考になる。15の歌では夕月が恋心を抱きはじめた状態、「有明」が恋の相手との関係が発展していった結果に対応しているのであろう。そして、「有明」には後朝が意識されていると考えられる。「くもらで見ばや」というのは、「涙を伴わずに、晴々とした気持で見たいものだなあ」という意であろう。恋の幸福な成就を願っているのである。

16の歌の「雲のかかれる」は「あるかなきか」という月の状態を表現するとともに、恋の行方を思いやることからくる不安を暗示してもいるのであろう。下句は心象風景の象徴的表現となっているのである。

このように、14・15・16の三首の慈円歌は、夕月によって、萌芽した恋心の状態を象徴的に表現したものであった。夕月は、和歌において、

かぜふけばえだやすからぬこのまよりほのめく秋のゆふづくよ かな（二度本金葉集・巻三・秋・一七五・忠隆）

秋のよの心をつくすはじめとてほのかにみゆる夕づくよかな （千載集・巻四・秋上・二七四・実家）

といったように、ほのかなもの、初期状態のものとして詠まれていた。初期の恋の心の状態を象徴的に表すものとしてふさわしい材料

であったのである。15の歌では、「有明」との対照により、特に初期状態としてのイメージが強く表れているのであるが、月の満ち欠けと恋の進行とを重ね合わせるとらえ方がなされていたと言える。その背景には、形をもつ事物と形をもたない人間の心とを重ね合わせるとらえ方があったと考えられるのである。慈円歌には、人間の心を自覚的・分析的に見つめていった結果得られた表現が用いられていたと言えるであろう。

むすび

以上、『後拾遺集』から『新古今集』成立ころまでの「初恋」題の歌をほぼ時代を追って検討してきた。その中で、題詠歌の独自性が形成されていく過程が、その一面なりとも明らかになったのではないかと思う。

堀河朝歌壇のころの「初恋」題歌では恋の相手との関係に関心がはらわれており、また、贈答歌に倣った面があったが、だんだんそうした歌は減っていき、かわって、自分の恋心を自覚的に見つめるものが中心となっていった。「初恋」の題意のとらえ方が変化していったのであるが、日常詠とあまり違いのないものから題詠歌独自のものへという方向をたどったと言えるであろう。また、表現の上では、初期の恋心を事物によって象徴化して描き出すものが、新古今時代にはみられるようになってくる。

思うに、「初恋」という題の設定そのものが、日常詠とは一線を画する題詠歌独自の世界を創出することを要請する面があったのではないか。「初恋」という題が示されることによって、それまではとりたてて意識されることのなかった、恋心を抱きはじめるという人間の心の変化に、歌人たちが目を向けるようになっていたのであろう。題の設定によって、目には見えない、人間の心の変化が自覚され、表現の俎上に載せられるようになったのである。

象徴的とは新古今歌風の特徴として挙げられるもののひとつであり、何も「初恋」題歌に限ったことではない。しかし、歌人たちが恋心の萌芽に目を向けた時、それをいかなる方法で表現するか――その問題に立ち向かったときに、象徴化の方法が要請された、そのような一面があったことを認めてよいように思う。

題の設定が歌の内容や表現の上に新しいものを要求し、また、そうした歌が詠まれることによって題意が深められていく――そのような相互作用があったと考えられるのである。

本稿ではもっぱら「初恋」題の歌をとりあげたが、もちろん恋題全体への見通しももたねばならないであろうし、季の題詠歌との関係も検討していく必要があろう。ただ、はじめに示した、題詠の深化と発展の具体相の一端を明らかにするという目的は、ある程度達成できたように思う。「初恋」と同様の性格をもつ題に「忍恋」があり、「初恋」題との関係も深いので、「忍恋」題については詳細に検討を加える必要を感じるが、別の機会を期したい。

注

（1）橋本不美男『院政期の歌壇史研究』（武蔵野書院　昭和四十一年二月）

（2）井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』（笠間書房　昭和五十三年十月）

（3）橋本不美男『王朝歌壇史の研究』（笠間書房　昭和四十七年一月）「第四章・第四節　歌題の生成と展開」に、恋題の展開が概観されている。

（4）勅撰集の本文・歌番号は『新編国歌大観』第一巻（角川書店　昭和五十八年二月）に拠る。以下、歌集などからの引用に際して、清濁・仮名遣い・句読点等の表記に関して、若干私意を加えたところがある。

（5）『国信家歌合』の本文は、萩谷朴校注の日本古典文学大系74『歌合集』（岩波書店　昭和四十年三月）に拠る。

（6）この歌合は、証本の一つである宮内庁書陵部本（注5書の底本）の一番判詞冒頭部分に「左右歌伴読合了。亭主命、縦雖无判、唯以衆議可被董定者、乃互忘左右之義、各達所看而已」とあり、衆議判であったことが知られる。これに関して、橋本氏は注1書「第三章・Ⅲ　国信卿家歌合の意義」の中で「俊頼が事実上判者の位置にあった（一七六頁）」とされた。これに対して、萩谷朴氏は、むしろ基俊に判の主導権があった、とされる（『平安朝歌合大成』六）。主判が誰であったかという問題はさておき、判詞中の発言者に関しては、萩谷氏の見解（注5書）にしばらく従っておく。

（7）本歌合の判詞には、他にも少なからず題に関する発言がみられる。以下、気付いたものを指摘しておく。

五番―右のうたは、ただよのみじかきことをなげかれて、後朝の心はすくなければ

八番―左の歌、後朝の心にはべらで、くれをまつ心にこそ右歌、後朝の歌にては忘水ぞあやしうきこゆれども

九番―右歌に、「あはずは泪かからましやは」とはいかに。「あひてあはぬ恋」は、あはぬにはまさるといふことのはべるか。

十番―左の歌、ふかきとがにはべらねども、あひてあはずといふ心やすくなくはべるらむ。右歌にこそ題のこころうかれたるやうにみたまふれ。

十一番―右歌は恋の心ぞすくなければども

（8）橋本不美男・滝澤貞夫『校本堀河院御時百首和歌とその研究―本文・研究篇―』（笠間書院　昭和五十一年三月）で指摘されている（三四五頁）。

（9）本百首の「初恋」題の歌については、注8書の研究篇にもとりあげられている（三七六～三七七頁）。本稿はこれと視点を異にする点があるが、煩雑になるのでいちいち注記しない。

（10）『堀河百首』の引用は『新編国歌大観』第四巻（角川書店　昭和六十一年五月）に拠る。

（11）『右大臣家百首』については、①雑賀美枝「兼実家十度百首について」（『ノートルダム清心女子大学国文科紀要』2　昭和四十三年三月）、②久保田淳・松野陽一『千載和歌集』（笠間書院　昭和四十四年九月）補注七、③久保田淳「歌切三点」（『和歌史研究会会報』40　昭和四十五年十二月）、④同「新古今前後研究断片（四）」（『和歌史研究会会報』44　昭和四十七年二月）、⑤松野陽一『藤原俊成の研究』（笠間書院　昭和四十八年三月）、⑥同「兼実家百首について」（『東北大学

教養部紀要』22　昭和五十年二月）、⑦松野陽一・山田富士雄「九条兼実の三種の百首」（『和歌史研究会会報』59　昭和五十一年三月）、⑧小島孝之「治承二年右大臣家百首の新出資料とその考察」（『国語と国文学』57―10　昭和五十五年十月）などによって本文が集成され、出詠者が確認または推論されてきた。出詠者に関しては、⑧の小島氏の見解に従っておく。

「初恋」題の歌は、上記の諸論により三十五首が知られる。次にその出典を掲げ、あわせて本稿における番号を示しておく。

勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』、私家集は『私家集大成』に拠る。（　）内は本稿における番号、〔　〕内は指摘された論文の番号を示す。

兼実―『新勅撰集』六六六（19）、『続古今集』九四九＝『万代集』一七六九、『続拾遺集』七六八（15）〔以上①〕

経家―『経家卿集』四五＝『新続古今集』一〇一二（20）〔①〕

隆信―『藤原隆信朝臣集』四七一（22）、『新後撰集』七七二（11）〔以上①〕

資隆―『手鑑月台』二八「五首切」二首（12）（25）＝『禅林葉集』九三〔④〕

仲綱―『書苑』5―4に（13）（16）（26）を含む五首〔⑧〕

資忠―『書苑』5―4に（17）（21）を含む五首〔⑧〕

良清―『書苑』5―4に（18）（23）を含む五首〔⑧〕

俊成―『長秋詠藻』四八六（1）・四八七（2）・四八八（3）・四八九（4）・四九〇（5）〔①〕

俊恵―『林葉集』六六七（6）・六六八（7）・六六九（8）・六七〇（9）・六七一（10）〔①〕

皇嘉門院別当―『新勅撰集』六六七（14）〔①〕

宜秋門院丹後―『新勅撰集』六六八（24）〔①〕

（12）久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会　昭和四十八年三月）四〇三頁に指摘されている。

（13）この伝説は、他に『宝物集』『袖中抄』『和歌色葉』などにみえる。

（14）百首歌の引用は注10に同じ。

（15）松野陽一『藤原俊成の研究』（笠間書院　昭和四十八年三月）五六五～五七五頁・五七七～五七八頁参照。

（16）前掲書六四二頁参照。

（17）萩谷朴『平安朝歌合大成』八（私家版　昭和四十年四月）の通し番号四三〇。本書で治承二年五月以前と推定されている。

（18）小西甚一編『新校六百番歌合』（有精堂　昭和五十一年六月）に拠る。

（19）このような題に対する考え方は、

又〔題を〕かしらにいただきて出たる歌、無念と申すべし。ふるくも秀逸どもの中に左様のためし侍れども、それを本に引くべきに候はず。（『毎月抄』―『歌論集一』三弥井書店　三二四頁）

題を上句に尽しつるはわろし。只一句によみたるもわろけれど、堀河院百首題は一字づつにてあれば、さやうならむ題の歌にておほくよまむには、初めの五字によみたらむもくるしからず。但し、其れも一首をよまむ歌に、やがて初五字によみ入れたらんは、無念に聞ゆべし。（『詠歌一体』―同右　三五一～三五二頁）

といった題詠論に、つながっていくのであろう。

(20)『影供歌合』の本文は群書類従に拠る。

(21)『私家集大成』3（明治書院　昭和四十九年七月）に拠る。なお、16の歌は、底本（書陵部本）・青蓮院本等に欠けている「廿題百首」（「治承題百首」）中の作である。

（大学院博士前期課程）

講座平安文学論究　第一輯

歌人及び私家集について、研究・資料・文献目録を収める。執筆陣は、新藤協三・仁尾雅信・伊井春樹・久保木哲夫・橋本ゆり・津本信博・山本一・川村晃生・杉谷寿郎・岩坪健の各氏。平安文学論究会編。（A5版　二九二頁　昭和五十九年九月三十日刊　風間書房　定価七〇〇〇円）

講座平安文学論究　第二輯

古今和歌集に関する、研究及び文献目録。執筆陣は、樋口芳麻呂・今井優・菊池靖彦・田中登・吉原栄徳・神谷かをる・吉川栄治・山口博・熊倉千之・上岡勇司・三輪正胤・田島智子の各氏。（A5版　三三八頁　昭和六十年五月三十一日刊　風間書房　定価八〇〇〇円）

講座平安文学論究　第三輯

金葉集・詞花集・千載集、及び同時代の歌人についての研究と文献目録。執筆陣は、滝澤貞夫・三村晃功・後藤重郎・糸賀きみ江・松野陽一・森本元子・井上宗雄・安田純生・青木賢豪・佐藤明浩の各氏。（A5版　三六三頁　昭和六十一年七月三十一日刊　風間書房　定価八〇〇〇円）